

チートなタブレットを持って
快適異世界生活
2

ちびすけ

CHIBISUKE

Illustration

ヤミーゴ

CHARACTERS

登場人物紹介

ラグラー

一見チャラいが
実は頼れる、お兄さんの
存在な「暁」の一員。

ケルヴィン

「暁」の一員。
生真面目で怖そうだが、
実は面倒見がいい。

ハーネ

風魔法を得意とする
蛇系の魔獣で、
ケントの使役獣。

グレイシス

「暁」メンバーの
魔法薬師で、お色気
たっぷりなお姉様。

フェリス

ケントが所属する
パーティ「暁」でリーダーを
務める、美人エルフ。

クルウ

「暁」のメンバーの少年。
耳にした者を操る
「魔声」を持つ。

ケント

異世界に迷い込んで
しまった本編主人公。
タブレットに搭載された
便利アプリに助けられ、
異世界生活を楽しむ。

ライ

中級ダンジョンで
出会ったケントの
新たな使役獣。

手抜き料理をしたって、たまにはいいよね？

僕、山崎健斗やまざきけんはある日突然、気が付くと異世界にいた。

どうしたものかと途方に暮れたが、なぜか持っていたタブレットに入っていた、様々なアプリのおかげで快適に過ごせそうだとということが判明する。

冒険者となった僕は、Bランクの冒険者パーティ『暁』あかつきに加入して、使役獣しえきじゆうを手に入れたり、魔法薬師の資格をゲットしたりと、楽しく過ごしていた。

そんな異世界での、ある日のこと。

「今日もいい天気だな」

《シュ》

僕の言葉に同意するように、『使役獣』のアプリで使役している葉羽蛇はばねへびのハーネが鳴き声を上げる。

僕は今、家の裏側にある野菜を植えている畑に、地球のものを買えるアプリ『ショッピング』で

購入した肥料をやり、特大じょうろで水を撒^まいていた。

この畑には、『シヨッピング』で購入したトマトとキュウリ、それからバジルが植えられている。
「水やりはこんなものかな……それにしても、あっちい」

麦わら帽子を被っているので顔周りに影が出来て、太陽の眩^{まぶ}しさがだいぶ和^{やわ}らいでいるけど、最近^{さい}は日中、気温がかなり上がるので暑い。

首に巻いていたタオルで顔と首に流れる汗を拭^ふいていると、ハーネが羽を動かしてそよ風を送ってくれた。

なんだか扇^{せん}風機^{ふうき}に当たってるみたいだな。

ありがとうと言いながら空を見上げると、大きな雲が青い空を泳ぐように動いている。

「そろそろお昼ご飯の時間だな。ハーネ、お腹空いたか？」

《シュー！》

「そうかそうか。それじゃあ昼ご飯にしよう」

《シュシュ〜！》

僕の腕に絡まりながら尻尾をフリフリ振るハーネをそのままに、使っていた道具を仕舞って家の中へと戻った。

汗を掻^かいたので部屋に戻って一度着替えてから、台所に立つ。

「ん〜……何を食べようかな」

実は今日、久し振りに一人で家にいるのだ。

暁の全員で一軒家に住んでいるんだけど、フェリスさんとクルウ君は用事があるみたいで、夕食を外で済ませてくると言っていた。

ラグラーさんとケルヴィンさんは、暁としてギルドから魔獣の討伐依頼を受けていて明日まで帰ってこないし、グレイシスさんも魔法薬作りに必要なものを採取するために二三日家を空ける予定だ。

そんなわけで、ゆつくりと過ごせる。

こんな日は、たまには手抜き料理でもいいでしょ。

「おにぎりと味噌^{みそ}汁^{じゅう}にしよう」

冷蔵庫の中からラップで包んだ残り物のご飯を数個取り出し、台所の上に並べる。

「ハーネ、よろしくな」

《シュッ！》

ハーネは僕の腕から離れると、ラップで包んだご飯の周りをグルリと体で囲み——葉脈のような模様が入った羽を、まるで蜂^{はち}が飛んでいるみたいな音と共に目では追えない速さで動かし始めた。

その間に僕は、ケトルに水を入れて火にかけてから、『シヨッピング』で鮭^{さけ}フレークと即席味噌

汁を購入。

手の平に浮かぶ魔法陣から出てきたのは、ガラス瓶に入った解れた鮭と、豆腐、長ネギ、油揚げが入った味噌汁だ。

「毎日じゃなくても、たまうに味噌汁が食べたくなるんだよね」

フリーズドライ製法で仕上げられた味噌汁は、香りや風味がいい上に、お湯を注いだ瞬間に出来る上がる、究極の時短料理。

元の世界で独身生活をしていた時には、大変お世話になった商品だ。

《シュュー！》

マグカップの中に袋から出した味噌汁の素を入れてみると、ハーネが僕の元まで飛んできて頭の上に乗る。

「お、もう終わったの？」

《シュューッ》

ピコピコ尻尾を振るハーネ。

ハーネが囲んでいたラップで包まれたご飯を手にとると、出来立てのようにホカホカと温まっていた。

魔法なのか何なのかは分かってないんだけど、今回のご飯みたいに、ハーネが何かを体で取り囲

んで超高速で羽を動かすと、その囲んだものを温めることが出来るのだ。

疲れないのかと聞いたこともあるんだけど、何が？ といった感じに首を傾げられたので、平気らしい。

まるで電子レンジのようだと思った僕は、『ハーネレンジ』と名付けて、かなり重宝しているのだ。

そんな温まったご飯をラップから取り出して、鮭フレークと共にガラスボウルに入れて混ぜる。

それを丸と三角に握って二つの皿に盛り付けてから、味噌汁のもとが入っているマグカップにお湯を注ぐ。

一瞬にして味噌汁のいい香りが台所の中に広がった。

「よし、出来上がり。居間に持って行って食べよう」

食卓が置かれている居間へ行き、早速食べることにする。

「いったきまーす！」

《シュュー！》

おにぎりを掴んでバクリと齧りつく僕の横で、ハーネは羽を動かして僕の肩から自分用の皿の位置まで頭を下げる。そして、バカリと開いた口でおにぎりを一口で食べてしまった。

僕が味噌汁とおにぎりを二個食べ終わる頃には、ハーネ用の皿にあった六個のおにぎりは綺麗に

お腹の中に消えていた。

ハーネさん？ 体の中間だけがツチノコみたいに丸く膨らんでますよ？

そんなこんなで食べ終わった食器を洗って片付け、室内の掃除も粗方やり終えると、もう今日はやる事がなくなってしまった。

何をしようかと悩んでいたら――

ドンドンドンッ！ と玄関が力強く叩かれた。

その音に、フェリスさん達が帰ってきたのかと思った……んだけど、もしそうなら、鍵を持ってらんだからドアを叩く必要はない。

来客があるとも聞いてないんだけどな、とハーネと顔を見合わせていると、玄関を叩く音が更に強くなった。

家には他に誰もいないし、扉を叩く強い音にちよつとだけビじる。

「すまん！ 知人の紹介で、ここにいる魔法薬師に会いに来た！ 誰か……誰かいなか!?」

ただ、玄関の向こうから聞こえてきた聞き覚えのあるその声に、僕は目を瞬かせた。
慌てて立ち上がった玄関まで走り、鍵を開けてドアを開く。

「……あ、やっぱり」

「ケ、ケント？ お前……何でここにいるんだ？」

そこにいたのは、この世界に来て最初にお世話になった街の警ら隊の隊長――アッギスさんだった。

アッギスさんは、驚いた表情で僕を見下ろしている。

まあ、立ち話もなんだからということで、家の中に入ってもらうことにした。

最初は断ろうとしていたアッギスさんだったが、すぐにここに来了た目的を思い出したのか、「邪魔するぞ」と頭を下げながら、入ってきてくれた。

居間のソファーにアッギスさんと向かい合って座ってから、僕は首を傾げる。

「急にアッギスさんが訪ねてきてビックリしました」

「ああ、そういえば暁に入ってたこの前言ってたよな……すっかり忘れていたよ」
アッギスさんは首の後ろを撫で、苦笑してから口を開く。

「俺の奥さん……妻が妊娠中だったのは、この前話しただろう？」

「確か、臨月なんですよ？ 何かあったんですか？」

「実は、妊婦が稀にかかる『魔力中毒症』になっちゃってます……」

「妊婦さんがかかる、魔力中毒症……？」

聞けば、『魔力中毒』とは、体内に許容量を超える魔力が溜まった時に発症するらしい。

症状としては、眩暈や吐き気が出るが多く、次に耳鳴りや目の充血、動悸息切れなどなど、

様々な症状が出る。

妊婦だけでなく、成長と共に増える魔力量に体がついていけない子供もかかることがあるが、体が出来上がっていけば自然に治る。

一方で妊婦の場合は、自分の魔力に子供の魔力もプラスされることで、発症するんだとか。

もともと、お腹の中にいる子供の魔力量は基本的に少ないので、影響が出ることは少ない。しかしごく稀に、魔力量が多い時に発症するそう。

「最近まで、そんなに魔力量が多いと言われてなかったから安心してたんだが……ここ数日で急に魔力量が増えたみたいなんだ。出産してしまえば徐々によくなるんだが、悪阻の時よりも酷い吐き気で飯も食えない状態で……日に日にやつれていく妻を見ると、妻の体や生まれてくる子供のことが心配だな」

「確かに心配ですよね」

「それに、もう本当にいつ生まれてもおかしくない状況なんだ。なのに、あんな状態で産気付いたら……体力が持つかどうか分からないと医者に言われたんだ」

「えっ、それって結構ヤバイ状態ですよね!？」

どうも、いろんな病院や薬師、魔法薬師に奥さんを診てもらったが、そこで処方される薬も魔法薬も、どれも同じようなものだったらしく、症状は全く改善されなかったらしい。

魔力中毒症に効果がある薬は色々あって、普通であれば飲めばすぐに症状が治まるはずなのだが……アツギスさんの奥さんの場合は、なぜか改善されないという。

ただ、妊娠しているため、色々な薬を飲むのは避けたい。妊娠中に薬や魔法薬を飲み過ぎると、生まれてくる赤ちゃんによくない影響が出てしまうのだ。地球でも似た話を聞いたことがあったっけ。

そんなことを思っていると、アツギスさんが溜息を吐きながら話を続ける。

「魔法薬師協会に勤めている友人がいるから、そいつに相談したんだが……魔法薬師協会で販売している魔法薬であれば治るかもしれないと言われてた。ただ、協会の薬は高級で、もし複数回飲まないといけなくなった場合、金銭的に辛くなってくる。であれば、魔法薬師に直接依頼したらいというところで、暁の魔法薬師二人——フェリスさんと、特に 그레이シスさんならどうかと、紹介されたんだよ」

「 그레이シスさん 師匠! 貴女つてやつぱり凄い魔法薬師なんですね!

ただ、話を聞いた僕は申し訳ない気持ちになっちゃった。

「アツギスさん……すみません。 그레이シスさんは、魔法薬の調合で使う材料の採取に出ていて、あと数日は帰ってこないんです」

「そんなんっ! なんとか……なんとかして、連絡は取れないか?」

「その……連絡が一切出来ないダンジョンに潜っている最中でして……」

僕の言葉に、アッギスさんの瞳が落胆の色に染まった。

そんな彼を見て、僕はどうかして助けることが出来ないかと考える。

「あの、アッギスさん」

「いや……すまない。急に押し掛けてしまったりして」

そう言っ、アッギスさんはソファから立ち上がる。

大きな背中を丸め、足取り重く玄関へと歩くアッギスさんの背中に、僕は声をかけた。

「待ってください！ あの、もしよければ……奥さんに処方する魔法薬、僕に調合させていただけませんか？」

アッギスさんは僕の突然の言葉に困惑した様子だった。

そんな彼に、魔法薬師の証であるエメラルドが付いたバングルを見せて、自分が魔法薬師の資格を取得したと、グレイシスさんの唯一の弟子であることも伝える。

「もしも僕の腕が信用出来ないなら、グレイシスさん達が帰ってきた時に、すぐに魔法薬を調合してもらえよう頼むことにします。そのためにも、今までに奥さんが服用した魔法薬の種類を教えてくださいませんか？」

そう言っ、アッギスさんは逡巡した様子を見せたが、すぐに承諾してくれた。

紙に今までの症状と服用した魔法薬の種類を書き、最後にアッギスさんの住んでいる住所を書き込んでから、懐に手を入れる。

そこから取り出されたのは、小さな瓶。

どうやら、奥さんが服用していた魔法薬の一つらしい。

アッギスさんはその瓶を眺めながら、しみじみと頷く。

「しかし……まさか、ケントが魔法薬師になっているとは驚いたな」

そう言っ、先ほど書いた紙と一緒に僕に手渡してくれた。

「俺は……妻の症状がよくなっ、子供が無事に生まれてくるためだっ、なんでもするつもりだ。だから、ケントが妻を治してくれる魔法薬を調合出来るなら、お願いしたい。もし……どうしても無理そうなら、その時はその師匠とやらに頼みたい。それでいいか？」

「はい、もちろんです！」

僕が頷くと、「よろしくな」と僕の肩を叩いてから、アッギスさんは帰っていった。

『情報 Lv3』

玄関を閉めて鍵をかけ、アツギスさんが書いてくれた紙を見ながら居間へと戻る。
ソファーに座ると、頭の上にハーネが乗ってくる。

僕がうくと首を傾げれば、ハーネも真似するように頭を傾けていた。
ハーネの行動が本当に可愛くて癒される。

「どこに行っても同じ薬を処方されることは、医師から同じ病気だと診断されたわけだな。でもその魔法薬では治らない……となると、魔法薬の材料の質があまりいいものじゃなかったのか、調合の仕方や魔力量が足りてないってことだよな？」

今まで処方された薬を書き出してもらったけど、確かにどれも似たようなものだし。

『魔力抑制薬』

『吐き気止め』

『眩暈止め』

主にこの三つの魔法薬が多く処方されている。

それを確認した僕は、タブレットを出して、アプリ『魔法薬の調合 Lv2』を開く。

紙に書かれた薬と同じようなものがアプリの中にあるか確認するためだ。

いざ見てみると、表の上の方にあった……ってことは、調合する難易度としては、そんなに高くはないんだな。

それから机の上にある、アツギスさんが置いていった魔法薬を『カメラ』のアプリで撮り、『情報 Lv2』で確認してみる。

【魔力抑制剤】

・特徴 ……魔力の過剰な放出を抑え、鎮静させるはたらきがある

これしか書いていなかった。

顎に手を当てながら『情報』を見ていた僕は、ふと、『情報』のレベルを上げたらどうなんだろうかと考える。

レベルを上げれば、この他にも何か情報が表示されるかもしれない。

ということ、サクッとレベルを上げようと決めた。

アプリの画面の右上をタップする。

「Lvを上げますか？ はい／いいえ」

『はい』をタップ。

【※『情報 Lv 3』にするには、560000ポイントが必要になります】

『同意』をタップ。

するとすぐに、画面上から五十六万ポイントが消え、時計マークが浮かんだ。

タブレット内のポイント……つまるところお金が一気に減ったことに内心ちよつとビビりながらも、また頑張つて貯めようと決心する。

以前、アツギスさんに何かあった時は絶対に助けると心に誓った。

その時が思ったよりもかなり早く来たけど、今やらなきゃいつやるんだ！

アツギスさんには、あんな寂しそうな笑顔は似合わない。

そんなことを思っていると、アプリの時計マークが消えた。

「んじゃ、早速使つてみますかね」

『情報』を開くと新しい項目が出来ていた。

元々あったのは、【人物／食／装備】の三つ。

そこに【魔獣・魔草／薬・魔法薬／その他】の三項目が加わっている。

そのうちの『薬・魔法薬』をタップし、さつき『カメラ』で撮ったばかりの、アツギスさんが

持ってきた魔法薬を表示する。

【魔力抑制剤】

- ・ 調合者 .. 魔法薬師 アイエル・ゴートン
- ・ 入手難易度 .. C
- ・ 特徴 .. 魔力の過剰な放出を抑え、鎮静させるはたらきがある
- ・ 用法 用量 .. 一日一回就寝前に服用
- ・ 魔法薬ランク .. C
- ・ 治癒速度 .. D

「お、結構新しい感じになったじゃん。見える箇所も増えたし」

一気に五つも増えるとはありがたい。

まあ、調合者の名前が出てくるとは思わなかったけど、かなり詳しい情報が手に入ったんじゃないだろうか？

しかし、魔法薬ランクがCつて……微妙なラインだな。

アツギスさんの奥さんに処方する魔法薬は、魔法薬ランクがB以上のものじゃないと意味がな

いつてことは分かった。

腕を組んで情報を見ていた僕は、ふと思い出したことがあり、一旦自分の部屋へ戻って机の引き出しを漁る。

この引き出しには、以前練習のために大量に作った魔法薬を、他に置き場所がなかったのしまっているのだ。

《シュー？》

頭に乗ったままのハーネが不思議そうに声を上げた。

「ん？ いや、ちょっと前に魔力を抑える薬を作ったのを思い出したんだけど……ラベルを付けるの忘れて、どれか分かんなくなっちゃったんだよ」

たくさんある小さな瓶を手にとって「これか？」「それともこっちか？」と悩んでいると、ハーネが頭の上から下りてきた。

そして、羽を動かしながら引き出しの上まで移動すると、枝分かれした舌をチロチロツと出しながら魔法薬をジーツと眺め――

《シュー！》

一つの小瓶を咥えた。

え、もしかして捜し出してくれたの？

驚きつつも『カメラ』で撮って『情報』で確認すれば、それはまさに捜していた魔力抑制の魔法薬だった。

どくお？ 偉いでしょー！ とでも言いたげに、頭の両側に付いている羽のような耳や尻尾をピコピコ動かし、得意満面なハーネ。

うちの子、可愛いただけじゃなくて色々と超優秀だ。

「ハーネ、今日の夕食はハーネが好きなお飯をいっぱい作ってやるからな！」

そんなことを言いながら、ひとしきりハーネを褒めたり撫でたりしてから、魔法薬を持って居間へ戻る。

机の上に自分が調合した魔法薬を置き、もう一度『情報』で確認。

【魔力抑制剤】

・調合者

..魔法薬師 ケント・ヤマザキ

・入手難易度

..――

・効果

..魔力の過剰な放出を抑え、鎮静させるはたらきがある

・用法 用量

..一日一回就寝前に服用

・魔法薬ランク

..C



・ 治癒速度

..C

僕が調合した魔力抑制剤は、アイエル・ゴートン氏が調合したものと同じCランクだった。
これじゃあアッギスさんの奥さんに飲ませても意味がないだろう。

僕が魔法薬を調合する時は地球の素材を混ぜると効能が上がるんだけど、これは確かこの世界の
素材だけで作ったもの。

ちゃんと地球の素材を使えば、ランクも上がるだろう。

……ただ、効果は上がるかもしれないけど、確実に治せる魔法薬を調合出来るかどうか……今の
僕のレベルだと微妙だよな。

確実に治せないんじゃない、意味がない。

僕はうーんとしぼし悩んでから、よしっ！ と両手で膝を叩く。

「今日は『魔法薬の調合』もレベルアップしちゃいましょうっ！」

いつかは『魔法薬の調合』アプリを、レベルアップする時が絶対くるんだ。

それが、今になっただけ。

ポイント
お金もまだあるし……やるなら今でしょっ！

ということ、タブレットの画面をポチリと押す。

【Lvを上げますか？ はい／いいえ】

『はい』をタップ。

【※『魔法薬の調合 Lv3』にするには、655000ポイントが必要になります】

当然、『同意』をタップ。

浮かび上がった時計マークを眺めながら、脳内で計算する。

『情報』と『魔法薬の調合』を合わせ、レベルアップのために一気に百二十万以上もお金が飛んでいったことになるのか。

心臓の辺りの服をギュッと握り締める。

1ポイント＝1レン＝元の世界の1円だから、この金額があれば新車を買えるな……

いや、そこはあまり考えないようにしよう。アツギスさんのためだし！

と、そこで時計のマークが消えたので、僕はレベルを上げた『魔法薬の調合』アプリを開いてみる。

【New！ 『中級魔法薬師』の称号を手に入りました】

お、称号までゲットしちゃったよ。

今までは、『魔法薬師見習い』程度の薬が作れるようになります、みたいな表記だったのにな。

さて、肝心の魔法薬の種類だけ……作れる種類が格段に多くなっている。

また、その表も少し変化していて、今回からは【注意事項】や【魔法薬ランク】なんて表示が増えていた。

『魔法薬ランク』はその名の通り、SS、S、A、B、C、D、Eまでのランクがあつて、魔法薬を評価するものらしい。さつき『情報』で見た中であつたのと、同じものだ。

SSは最上級のもので、ほとんど手に入らないレベル。

どんな怪我や病気、症状も治す万能薬だったり、不老不死になる薬、死者を蘇生^{そせい}させる薬なんか該当^{がいとう}するそうだ。

Sは最高位の魔法薬師や王宮魔法薬師などといった、一握りの優秀な人間しか作れないレベルの魔法薬。

Aだと上級魔法薬師が作るものがほとんどで、中級魔法薬師でも、魔力制御能力や調合力の高い人なら作れるレベルの魔法薬。

B、Cは中級以下の魔法薬師が作れる魔法薬。

Dは見習いレベルで、Eは粗悪品とのこと。

ちなみに、魔法薬のランクが高いからと言って、入手難易度や治癒速度が高評価になるわけでは

ないらしい。

そういえば称号も手に入ったんだっけ、と『情報』で自分のステータスを確認してみると、職業のところに『中級魔法薬師』の表示が増えていた。

どんどん新しいのが追加されていくなくと気になるけど、今は『魔法薬の調合』アプリの確認が先だな。

必要な魔法薬を探すため、アプリを開く。

表の上に検索欄があるので『魔力抑制剤』と打ち込めば、すぐに十五個ほどの魔法薬がヒットした。

それぞれ確認していくと、『魔力を完全に止める』ものと『過剰な放出を抑える』もの、それに『一時的に魔力を止める』ものなど、同じ抑制剤でも色々あるみたいだ。

アッギスさんの奥さんに必要な魔法薬は……話を聞く限りでは、『過剰な放出を抑える』やつがよさそうだろうか。

ただ、『過剰な放出を抑える』タイプの魔法薬は三つあるのだが、そのうちの二つは、注意事項に『妊婦服用——不可』と表示されていた。

なので必然的に、残っている魔法薬を選択することになる。

うん……『情報』のレベルを上げておいてよかったよ。

そのまま知らずに、妊婦さんが服用しちゃダメなものを調合していたかもしれないからね。

僕はタブレットの画面に表示されている魔法薬をタップして、どのような材料が必要か確認することにした。

【魔力抑制剤（妊婦服用可）】

※異世界のものを使用

乾燥したアグレブの実	… 3個	チツトの爪	… 1個	ヘルディク草	… 2束
カルグル草	… 1束	ヘルヒグスの鱗	… 1枚	炎淡魚の背骨	… 1つ
水狼の鬚	… 2本	ルコットの種	… 4粒	泥熊の牙	… 1個
チョコレート※	… 1欠片	スターフルーツ※	… 1個	オレンジ※	… 2個
キウイ※	… 1個	しその葉※	… 1枚	飲料水※	… 100ml

必要な材料はこんなものか。

ここに書いてある『異世界』つてのは、僕が元いた地球のことだ。

これらの素材は、地球のものを購入することが出来るアプリ『ショッピング』を使えば簡単に手に入る。

魔法薬のレシピも、今回のレベルアップで微妙に表示が変わって分かりやすくなった。『ショッピング』で買えばいいものにマークが付いたのはありがたいな。

それにしても……この材料を見ただけだと、いったい味はどうなっているのかと恐ろしくなってくる。

まあ、アプリの力で調合するわけだし、そんなに変な味にはならないだろう……たぶん。

ともかく、中級の魔法薬師が調合するものだけあって、使用する材料がさすがに多くなっているな。

これを自分一人で全て集めるのは……時間もないし、仮に時間があったとしても至難の業だ。見たことない素材も多いし、かなり強い魔獣の素材が多い。

『水狼の髭』や『泥熊の牙』なんて、普通の店で売ってなさそうだよな。

「でも、これを調合出来たら……アツギスさんの奥さんはきっと治るはず！」

《シュ〜！》

「お、ハーネもそう思うか？」

《シュューー！》

僕の問いに、ハーネも尻尾を振りつつ頷く。

それじゃあ、早速行動を起こさねば！

ということで、まずは『ショッピング』で買えるもの……※マークが付いているものを購入して、自室に置いておく。

それから残りの材料だけ……

とりあえず、街に買いに行かないといけないんだけど、どこで売っているかわからない。

全ての材料が一ヶ所で売られているはずがないし。

ああ、探し回ってる時間も惜しいな。

こういう時、フェリスさんやグレイシスさんがいれば、すぐに聞けたのに——と残念に思う。

「はあ。ショッピングでもこの世界のを買えればいいのになあ」

それか、この世界のを買える新しいアプリが出ればいいのに、なんて考えながらタブレットを眺める。

「……まあ、ないものはしょうがないな。時間がかかっても、街中にある材料屋をしらみつぶしに探して……ん？」

頭を掻きながら溜息を吐きそうになった時、ふと、腕に嵌められた魔法薬師の証のバングルが目に入る。

その時、唐突にグレイシスさんの言葉が頭の中に蘇った。

『魔法薬師になれば、街中で絶対に手に入れることが出来ないような最高級の——かなり良質な薬

草や魔法薬の材料を、安く手に入れることができるの』

そうだ、これだ！

僕は急いで立ち上がると、家を出て『魔法薬師協会』へと走って行ったのであった。アツギスさん、もうちょっとだけ待っててくださいね。

もう少ししたら、魔法薬を調合して持って行きますから！

魔法薬師協会でお買い物

魔法薬師協会は、試験を受けに行った日以来訪れていなかったから、一人で入る（ハーネもいるけど）には少し緊張した。

建物の広い柱廊ちゆうらうを通り抜け、受付がある所へと向かっていく。

思わず走りそうになるけど、さすがに早歩きくらいに抑える。

受付の前にまで行くと、受験の時にお世話になった初老の男性が、あの日と同じように受付窓口に立っていた。

「ヤマザキさん、お久しぶりでございます」

丁寧に挨拶をしてくれる彼に頭を下げつつ、早速本題に入る。

「こんにちは。あの、今日は魔法薬を調合する材料を購入したくて来たんですけど」

「かしこまりました。必要な材料はお決まりでしょうか？」

「はい、これに書いてます」

僕はポケットから、材料が書かれた紙を出す。

中には、『魔力抑制剤』に必要なものの他に、違う魔法薬の材料も書いている。

アツギスさんの奥さんは、たぶん体力も低下しているだろうから、『体力増加』や『貧血改善』などなど、妊婦さんも安心して服用出来る魔法薬も作ろうと思ひ、調べておいたのだ。

だいたいは手持ちの材料で何とかなりそうだったんだけど、妊婦さんでも使えるものとなると、足りない材料がちよくちよくあったんだよね。

僕が渡した紙を受け取った初老の男性は、書かれている材料を一つずつ確認していく。

「この材料を使って調合するのはヤマザキさんですか？」

そして、そう問いかけてきた。

「そうですね……何か問題がありましたか？」

僕が頷いて聞き返すと、一瞬驚きの表情を見せる初老の男性。

ただどすぐに、微笑ほほえみながら首を横に振った。

「いえいえ、何も問題ありませんよ……ただ、こちらの材料をご用意するのに、少しお時間をいただいてもよろしいでしょうか？」

「大丈夫です」

「お待ちになっている間、この建物内にいらつしやいますか？」

あー、どうしようかな。

街に出てもいいけど、材料はここで揃うし……この前来た時はあまり見て回れなかったから、建物の中を見学してもいいかもしれない。

「そうですね……それじゃあ、建物の中を見学しておこうかと思います」

「それでしたら材料が全て揃い次第、伝令リチューを向かわせますので、目印となる『香石』をお持ちください」

伝令リチュー？ 香石って何？

それを聞く前に、初老の男性は受付台の上に置いていた金色のハンドベルを振る。

——チリンツ、チリンツ。

澄んだ綺麗な音色がハンドベルから響く。

そしてその余韻が消える前に、受付台の上——僕と初老の男性の真ん中に、背中に筒を背負った小さな動物がどこからともなくやってきて、ちょこんと座った。

なるほど、このリスみたいなのが、伝令リチューなんだろう。

初老の男性は伝令リチューの前に、僕が持ってきた紙を置く。

『「薬草保管庫」と『薬用魔獣保管庫』へ行つて、それぞれの素材管理師へ渡すように。いいですね」

そんな彼の言葉を受けて、伝令リチューはピーーツ！ と鳴いてから、紙をクルクル巻いて背負っている筒の中に入れる。

そしてそのまま、タタタターツと走ってどこかへ行ってしまった。

あんなに小さいのに器用だな。それに案外足が速い。

伝令リチューを見送った僕は、初老の男性にタンブルキーホルダーみたいに金属に繋がれた香石を受け取ってから、協会内を散策することにした。

建物の中を散策するのは意外と面白かった。

薬草なのだろう見たこともないような植物や、魔獣の剥製、それから今まで協会内で製作された歴代の魔法薬が置かれている薬棚など、見飽きない。

気分はどこかの展示会に来たような感じだ。

家でやるのがなくなった時でも、ここに来ればいい暇潰しになりそうだな、なんて考えなが

らぶらついていた。

すると……

ピピー。

足元から可愛らしい鳴き声が聞こえてきた。

下を見ると、伝令リチューが首を傾げながら立っている。

「ああ、もう受付に戻ってもいいのかな」

「ピー……ビャッ!?」

「うん?」

僕を見上げながら可愛らしく鳴いていた伝令リチューが、突然奇妙な声を上げて固まってしまった。

しかも、全身の毛を逆立てながら僕の顔を凝視しているし、ガタガタと全身が震えてるんだけど……一体どうした!?

何をそんなに怯えているんだと驚いていると――

《シュ〜!》

僕の頭から肩の方へ移動してきたハーネが、により、と顔を出していた。

そしてその顔を下に向け、舌をチロチロツと出しつつ伝令リチューにご挨拶をする。

《シュシュ〜♪》

「ビビビビツ……ビビャーッ!」

嬉しそうな声……というか音? を出すハーネに対して、伝令リチューは警戒音を発して、素早い動きで僕から離れた。

「ああ……うん、ハーネが怖いのね」

ハーネを見てビビっている伝令リチュー。

まあそうだよ、リスからしたらへビは天敵だ。

嬉しそうに話しかけているハーネには申し訳ないが、相手が怖がつているのであまり身を乗り出さないようにしてもらうことにした。

《シュ〜……》

残念そうなハーネを宥めつつ、伝令リチューに声をかける。

「ごめんね、怖かったよね? ハーネは絶対君のことを襲わないから心配しないで。それよりも、僕を呼びに来てくれたんでしょ? 戻ろっか」

「ピ……ピピー……」

恐る恐るといった感じで、伝令リチューは移動を開始する。

僕の顔をタタタツと走り、何度か立ち止まっては振り返って、僕がついてくるのを確認する伝令

リチュー。

プリットしたお尻と尻尾を揺らす後ろ姿に顔が緩みそうになるけど、何度もこちらを振り向くのは……ハーネが自分を襲ってこないかと、確認しているのかもしれない。

ちよつと可哀想だなと思ったので、少し距離をとりながら、伝令リチューの後を歩いていった。

受付に着くと、伝令リチューは素早い動きでどこかへと行ってしまった。

ありがとうと言う暇もなかったなと思ってみると、初老の男性から声をかけられる。

「ヤマザキさん、お待たせいたしました。ご注文をいただいた材料が全て揃いましたので、ご確認ください」

そう言って魔法薬の材料の入った、蔦で編まれた籠を台の上に置かれた。

中を見れば、アプリで表示されていた材料の挿絵通りのものが全て入っていた。

ハーネは僕の頭の上から降りて、好きな匂いでもするのか籠の近くまで寄って匂いを熱心に嗅いでいる。

「はい。確かに全て揃っています」

ハーネを籠から離しながら僕がそう言うのと、初老の男性は何やら紙を取り出す。

「ありがとうございます。それでは支払いの方に移らせていただきますね」

どうやらこの紙は伝票らしい。

支払いはいくらくらいになるかなと、持っていた籠を台の上に置いてから、軽い気持ちで伝票を覗き込み――

目が飛び出るかと思った。

《魔法薬師協会 会員ケント・ヤマザキ様》

・乾燥したアグレブの実 3個

6200 レン

・チチットの爪 1個

3600 レン

・ヘルディク草 2束

4360 レン

・カルグル草 1束

4480 レン

・ヘルヒグスの鱗 1枚

23050 レン

・炎淡魚の背骨	1つ	
	59300	レン
・水狼の髭	2本	
	39580	レン
・ルコットの種	4粒	
	3000	レン
・泥熊の牙	1つ	
	331590	レン
・その他、魔獣の毒液や毒草など		
	58450	レン

合計 533610レン

見間違いかと思って目を擦ってからもう一度確認してみたけど、数字が変わることはない。すっげー高い。ここなら安く手に入れられるって話だったと思うんだけど……

伝票を見ながら固まっている僕を見て、男性が口を開いた。

「ここで取り扱っております魔法薬の材料は、国お抱えの『上級鑑定士』が認める最良のものしか

ございません。まあ少々値が張りますが……当協会が持つ材料と同等の材料を自身で手に入れる手間などを考えるならば、どうでしょうか。『安く』感じるのも『高く』感じるのも、お客様次第です」

その言葉に、僕は心の中で確かにそうだな、と頷く。

もし僕が、これらの材料を手に入れようとしても、まずレベルが足りない。

今の戦闘力だって、中級ダンジョンの中階層で四苦八苦しながら戦い、ハーネと力を合わせてようやく魔獣を倒せるくらいだ。

しかし、手に入りたい材料は、かなりの高レベル——中級から上級ダンジョンにいる強い魔獣のものである。

そんな魔獣と戦って、協会にある物と同じクオリティのものを手に入れるなんて、出来るはずもない。

たぶん、購入しようと思っている材料の『元』となる魔獣と直接対面なんてしたら……速攻で倒される自信がある。

運よく倒せたり素材を拾えたりしたとしても、こんなにいい状態のものは手に入らないだろう。

そう考えると、他のどこにも置いてないような最良の材料をここで少し高くても購入出来るということは、今の僕にとっては『安い』方なんだと結論付ける。

初老の男性は、それに、と口を開く。

「当協会でご購入いただいた材料で調合するならば、他のどのような材料で調合した魔法薬よりも効果が格段に上がることを、保証いたします」

「え……それは本当ですか!？」

「はい。魔法薬は使う材料の品質が良ければ良いほど、効果が高くなります。なので、品質が悪い材料で調合しますと、魔法薬の効果も悪くなります」

「へえ」

感心して頷いていると、初老の男性は思い出したように付け足す。

「ヤマザキさんのお師匠様——シャム様も、ご自分で材料を手に入れられなかった場合は、ここで購入されていますよ」

彼によれば、グレイシスさんはここで材料を購入する他に、ダンジョンで採ってきた魔法薬の材料だったり、調合した魔法薬だったり売っているそうだ。

そういえば、よく街に魔法薬とかを卸しに行くって言うていたけど……それは、ここに来ていたんだな。

一人納得して頷いていると、男性が首を傾げる。

「それでは、お支払いはいかがいたしましたでしょうか? 『炎淡魚の背骨』と『水狼の髭』、それに『泥

熊の牙』以外ですと街でも普通に売られていますので、すぐに手に入れることが出来ると思います。ちなみに、『泥熊』は繁殖期^{はんしよくき}以外、滅多に姿を見せない魔獣でして、大変手に入りにくい商品となっております、他のものよりも少々値が張っております」

言われてみれば、確かに高い。一つだけ桁が違うもんな。

……でも、この材料を使えば効果が格段に上がるという言葉が確かなら、今回だけはここで買ってみようかな……

少々以上の値はするけど、今回の魔法薬は、出来る限り良いものを調合したいと思っているので、この出費は必要な金額だろう。

僕は腕輪の中から全財産を入れている革袋を取り出すと、中からお札の束を取り出す。十万レンの束を六つ、そつと受付窓口の台に置いた。

「全部購入します!」

「かしこまりました。それではどうぞ、こちらの今回ご注文いただきました材料をお渡しいたしますね」

支払いを済ませ、材料が入った籠を受け取ると、初老の男性がニッコリ笑う。

「ヤマザキさん、魔法薬師になった一年目は、当協会が指定する魔法薬を調合し、それを協会へ提出しなければならぬ——ということ覚えていらつしやいますか?」

「え？ あ、はい。もちろん覚えていますが？」

魔法薬を調合する時、調合方法や魔力の流し方などは人によって千差万別。

だから、一年間色々な魔法薬を提出させ、試験の時に提出されたものと徹底的に比べて、不正が行われていなかったかを見極める。

そんな説明をされたことを思い出し、それがどうしたのだろうと首を傾げていると、驚きの言葉を告げられた。

「それでは、最初に提出していただく魔法薬の出題をいたします」

「ほえ？」

思わず間の抜けた声が出てしまった。

「提出していただく魔法薬ですが……今回作ろうとしているものと全く同じものを、同じ材料で調合し、提出してください。ちなみに、通常であれば材料を揃えるところからが提出課題で行う作業ですが、今回に限り、協会の負担で同じ材料を一回分、ご用意いたしますよう」

なるほど、同じものか。それなら色々調べる必要もないから楽かな。

……って、そうじゃなくて。

「え、材料……いいんですか？」

そう。こんなに高級な材料を用意してくれるというのに、僕は驚いてしまった。

「ええ。今回購入された材料を使ってどんな魔法薬を調合するのか、上の者が気になったようでした。今回は協会で購入したもので同じものを作るようにとの上の者の指示でしたので、材料はこちらでご用意いたします。もちろん、完成した魔法薬は買い取りとして扱わせていただきます……ああ、ご安心ください。次に出題する魔法薬は、他の魔法薬師と同じく、街でも手に入れやすい材料を使ったものとなりますので」

タダで材料を手に入れて調合するのに、買取までしてもらえるなんてラッキーじゃん！

『上の者』ってのが気になったけど、まあ聞いても教えてもらえないよね。

そうだ。せっかくだから、以前から気になっていたことを聞いてみよう。

「あの、自分が調合した魔法薬を売る時の値段って、基準とかあるんですか？」

「……ふむ。そういえば、ヤマザキさんの故郷はここからとても離れた場所にあり、魔法薬師についてあまり知識がないとおっしゃっていましたね」

男性は、魔法薬師試験を受けた時にグレイシスさんから聞いた、僕が田舎から出てきたという嘘の身の上話を思っているのだろう。

試験官をしてくれたエドガーさんは、悪気は全くない感じで「田舎」発言してたけど……彼とは違って、気を遣った表現をしてくれて好印象だった。

うん、気遣いって大事よね。

……まあ、別に本当に田舎から出てきたわけじゃないから、いいんだけど。
そんなことを考えていると、男性は納得したように頷く。

「……おそらく、シャム様も当たり前のこと過ぎて、ご説明を省いてしまったのでしょうか」
そう言うと、僕に色々と教えてくれた。

「まず、『魔法薬の値段の基準』でござりますが、答えは——『ない』です」

「えっ、そうなんですか!？」

僕が驚いた表情を見ると、頭の上のハーネも僕を真似してビックリした風の動きをする。

そんな僕達を見て笑いながら、男性は続ける。

「はい。なぜならばご存知の通り、魔法薬の作り方は千差万別、人によって全く違います。とすれば当然、同じ薬でも質が変わってくるでしょう。必要最低限の材料費を考慮した最低価格のようなものはありますが、魔法薬の出来栄えによって買取価格が変わってくるのが普通になります……そういう意味で、基準は『ない』と言えるのですよ」

なるほど、同じ名前の魔法薬だからといって、効果が違うのに買取価格が同じでは魔法薬師のモチベーション低下にも繋がるか。

「……とはいえ、買取側も鑑定が出来る者ばかりではありません。そのため、魔法薬の種類と、それを作った者の魔法薬師としての経歴や格によって、買い取り額を固定している店も少なくないの

です。なので、販売する店は慎重に選んだ方がいいですね。それと——」

それから僕は、おそらく魔法薬師としては常識なのである事柄を、いくつも彼に教えてもらい、提出用の魔法薬の材料も受け取ってから、協会を後にしたのだった。

ケント特製魔法薬をお届け

《シユシユ》

たっぷり色々と教えてもらってから、魔法薬師協会の建物から出ると、頭上 of ハーネが羽を動かして籠の側まで近寄ってきた。

気になる匂いでもするのか、クンクンと熱心に嗅いでいる。

ピコピコと尻尾を振る姿は、とても機嫌が良さそうだ。

受付窓口で籠が置かれた時も、嬉しそうに嗅いでいたし。

そういえば、いつかフェリスさんが言ってたな。

ハーネの種族——葉羽蛇は、その鋭い嗅覚によって、嗅いだものの品質を判断することが出来るんだって。